

## 59年目の夏、長崎と韓国を結ぶ

平成 16 年 8 月、日本赤十字社長崎原爆病院副院長、森 秀樹

今年はいつもの夏よりもひどく暑く感じます。ちょうど59年前の8月9日もそうでした。午前 11 時 2 分、世界がひと時消えてしまったと思われるほどの閃光、一瞬の静寂の後、すべてをなぎ払う怒涛の熱風。この時に長崎ではおよそ 7 万人の命と生活が美しい緑と共に消えてしまいました。しかし、悲劇の後に長い苦しみが一一人ひとりに始まりました。わが子をなくした親、同胞を失った兄弟、親をなくした子等、そしてこれは終わりではありませんでした。原子爆弾（原爆）の後遺症はその後も続きました。

それから 59 年、韓国にも当時日本で原爆に被爆して帰国した原爆被害者（ヒバクシャ）がいます。その多くはすでに死亡されていますが、現在推定 2000 余名です。在韩国原爆被害者（在韓ヒバクシャ）の苦しみも日本と同様に続いています。日本国内ではヒバクシャに対して医療支援が整備され、健診や相談そして治療が行われています。2002 年 6 月から開始された在外ヒバクシャ渡日等支援事業（厚労省補助事業）が大韓赤十字社の協力によって実施されるようになり、韓国から渡日出来る方は当院をはじめとして主に長崎市内の病院で治療や健診を受けておられます。今回、支援事業の一環として現地健康相談事業を長崎県・長崎市から要請を受け、初めて在韓ヒバクシャ健康診断・健康相談事業報告を韓国国内で実施することになりました。

この事業の目的は在韓ヒバクシャ対策として、韓国に医師を派遣して健康診断・健康相談を実施することにより原爆後障害に対する不安の解消と健康の増進を図ることです。協力を大韓赤十字社特殊福祉事業所、韓国原爆被害者協会、大韓赤十字大邱（テグ）病院（2003 年 9 月 30 日にヒバクシャ医療の協力等を目的として当院と姉妹提携を結びました）にお願いして、大韓民国慶尚南道陝川（ハプチョン）郡、大韓赤十字社陝川原爆被害者福祉会館で、2004 年 7 月 21 日、22 日、23 日に実施されました。派遣員としては日本赤十字社長崎原爆病院からが最も多く、私を団長として、河野昌文第 1 整形外科部長、宮原勝彦理学療法課長です。その他に放射線影響研究所臨床研究部長、長崎大学国際ヒバクシャ医療センター助教授、長崎大学原爆後障害医療研究施設助教授、そして長崎市の保健師が 2 名参加しました。

具体的には大韓赤十字大邱病院で実施された健康診断結果表、陝川原爆被害者福祉会館の個人カルテから会館の看護師が抜粋した情報、会館の入所者が記載した問診表等を用い、まず派遣団の保健師が通訳を介して詳細な聞き取り調査を行いました。そして入所者を 5 組に分け、その各々の組を一人の派遣団医者が分担し、医師は上記の資料を用いて通訳を介して健康相談あるいは健康診断を行いました。派遣団の理学療法士は会館の物理治療士に日常の訓練の指導を行うと共に入所者に対して健康体操を指導しました。

健康相談者数は 70 名（延べ 80 名、内科と整形外科の両方の相談者 = 10 名）で、

男性 = 17 名、女性 = 53 名、平均年齢 = 78 歳でした。実施後の印象としては全般的に日本におけるヒバクシャの方々と同じように高齢に伴う慢性疾患を有していました。具体的には高血圧、整形外科的疾患（退行性病変がほとんど）、糖尿病、心疾患、脳血管疾患、痴呆、慢性呼吸器疾患、軽度の貧血等が見られ、これらの多くはすでに治療を受けられてコントロールも比較的良好でした。訴えとしては整形外科疾患に関するものが多かったようです。今回の相談者の中には重症の患者はおらず、これらの重症の方々はすでに入院されていました。入所者の多くは活動性が高く、概して健康でしたが、一部で被爆当時の思い出に悲哀や不安を感じる被爆者がおられました。

今回の事業は韓国の多くの方々との協力で実施できたことは言うまでもありません。これまでの日韓のヒバクシャに対する協力と友好の賜物であると思われ、とりわけ大韓赤十字社、陝川原爆被害者福祉会館、長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）の努力があって本事業を始めることが出来ました。今回はまず第 1 回ということで在韓ヒバクシャが入所されている陝川原爆被害者福祉会館で実施されました。この会館は 1996 年に開設され、日本からの支援金で建設され大韓赤十字社が運営しており、定員は 80 名です。今回の事業の全体的な流れはスムーズでしたが、やはり相談事業だけでは不十分な印象があり、健診結果を韓国側にフィードバックして、各ヒバクシャの健康管理に利用できるようにする事、また健診の内容の充実、例えば腹部エコー検査の導入なども考えられました。さらに、現地の医師、特に大韓赤十字社所属の医師等の参加があれば、相談事業と平行して治療についても検討できると思われ、今後の改善項目と考えられました。

8 月 9 日の長崎原爆死没者慰霊平和記念式典で小泉首相が「・・・こうした中、先月には、長崎県と長崎市が医師団を派遣し、韓国で初めてヒバクシャの健康診断を行い、現地の人々から高い評価を受けました。・・・」との言葉がありました。実際、今回の事業が終了した後には大韓赤十字社が相談事業を受けられた韓国ヒバクシャにアンケート調査を行ったところ、再度日本の専門医師と相談の機会があれば相談する = 85.7%、今回相談を受けなかった他のヒバクシャにも相談を勧める = 95.7%、日本の専門医師と相談後不安感や心配がある程度解消された = 62.8%等で、予想よりも高い評価を受ける事が出来、今後のこの事業の展開に弾みがつきました。

医師による健康診断・相談



理学療法士による指導



陝川原爆福社会館前での記念写真

